宮沢賢治の超越性／閉塞状況に挑んだ『火花』

谷口吉光（秋田県立大学）

曇り空が続いていた晩秋のある休日、つかの間の晴れ間を縫って、岩手県花巻市にある宮沢賢治記念館に行ってきた。賢治の童話や詩は読んでいたものの、その人となりについては知る機会がなく、以前から行ってみたいと思っていたのだ。

ほの暗い展示室は科学、芸術、宙（そら）、祈、農という５つの部門に分けられ、賢治の多面的な活動と作品を彼の内面世界の多様な側面として理解できるようになっていた。

何気なく会場を歩き始めると、たちまち展示品が火花を発しているような感覚に襲われた。たとえば賢治が盛岡高等農林学校で地質学を学び、後に北上川の川底の地層を見て「イギリスあたりの白亜の海岸を歩いているような気がする」と言ってそこを「イギリス海岸」と名づけた話。あるいは学校で学んだ農芸化学の知識を使って自ら肥料を設計し、窮乏する農民を救おうとした話。あるいは東北農村から「イーハトーブ」と言う理想郷のイメージを着想し、演劇や童話を書いて稗貫農学校の子どもたちに演じさせたという話。

賢治は自分が学んだ良い知識を、社会を変える原理ととらえ、その原理を閉塞的な現実に果敢にぶつけることによって、めざましい活動を生涯繰り広げたのだ。そんな感想が頭に浮かぶ。私が感じた「火花」とは賢治が掲げた原理が現実にぶつかって散らす緊張と軋轢のことだった。

肥料の作り方を知っている人はたくさんいても、その知識を使って農家のために肥料を作ろうという人はほとんどいないだろう。肥料の作り方という知識は知識として頭の中に留め置き、農家が困っていると聞けば同情はするが、その知識を現実の問題解決に活かそうとはしない。

「秋田県人のお勉強好き」という揶揄の言葉を県外の人に言われたことを思い出す。「そんなことをすれば誰に何を言われるかわからない」という反射的な恐怖心でも働くのだろうか。その結果、多くの良い知識は人びとの頭の中に空しく留まり、問題の多い現実は悪化の一途をたどるばかりである。

しかしこの悪弊は秋田県民だけのものではなく、日本人全体にも共有されている。山本七平氏が提起した「空気」や「日本教」という問題である。それによれば、日本人は人間関係の和を何よりも重んじる。場の「空気」を読むことが重要なのもそのせいだし、その性癖が日本人の無意識の宗教（日本教）になっているという。

和を重んじること自体は悪いことではないが、難しい状況に直面した時に、まわりに気兼ねして誰も正論を言わないとなれば和を破ることも必要になる。

現在の閉塞状況を嘆く人は多いが、代案を出す人は少ない。賢治は彼の時代にそれをやった人だと思う。その行動力の秘密は知識を原理として現実にぶつける勇気があったことだ。

文学者宮沢賢治はあまりに有名だが、実践者宮沢賢治の「超越性」を感じた私の胸の震えはその日から続いている。

（朝日新聞「あきたを語ろう」 2015 年 12 月 16 日掲載分に加筆・修正した）